連歌茶談前編　全

へ5
3511
1

門 へ利 5
號 3511
巻 1-3

大正

連歌のよりてきたる事久し
まゐそとつくそのいくらを
かきよくかなふてはさといもいゆく
あんある一笑さるなくさるるとき人
らこの本をものしこ　鶴□注

て嵯峨のおくれの庵なきにいる
さびしさをこうて泊瀬にいまそ
かりし本多相等者ちかしむかし
野乃ひとつき沈斎の郷乃川うり
ひらしの猿よりつるひとのまう

年ごろ此道をこゝろえて亀ふ
久方みちこのこゝろしのひて
十とせあまりうたやのうちに
かうひのよすかしとゝる連歌十
題百句をみ連歌誹諧井大かたを

世にきこえたる句をえらひて桜木に
あらはしけれは桜あきらけしや連歌
百韻同茶談といふ文の数々
書つらねて此道の栞ひと
しるして其の茶談乃名をしめす

つたなき言をそへよとて侍者をして
きこえぬへきやつれ年ふるちそ
あらはさんことをこふによりて其の文
くの名のみはすしらぬ道をつくる
ためていふはつまさいふ花のかを

ふるとつゝこのあたりあれ茶いをなせり
こゝにきつはなこのくさくとゐる
はなしにとり茶いを
のふみにあん
文政ときこ申庚辰のとし
みな月よらの日蓑笠茶雲
杏花園にて
しるす

連歌茶談前編

○八雲御抄第一に曰むかしは五十韻百韻とつくる事はなしまく上句までも下句までもいひかけつれはいまなからを付るなり今の様にくさる事は中比よりの事なり賦物なとも中ころよりの事歟

又曰発句は必いひきるへしなまのな
にハなまをなさとせぬ事なりかな
とも處しとも又春霞秋の風なと弁に
をへし
又曰上句にあしひきのなといひて
下の句に山といひてもいひにくき處を
なる事をへてせぬ事なり足引に
かきらす志もといふなそしてかつら

と人毎に案せる事也悪事なりひさ
かたハ月にかきらす雲ともなまとも
いひつ處あれともをへてはし先に
いふくこそいひきりまる様なるへし
百韻の中いひきらぬ句の五六句なと
まあまりきらんる連哥にもてあし
かる處さなりよくくこゝろえてもへし
又曰かまへて連哥をへあらぬ處に

ひきなしくつくるなり春まて久し
く秋まてひさしきる連歌せぬもの
のあつまりゐるたはれ事なり
又曰いたくいとしもなき連歌たも思ひ
出をせんまえやくする事ゝへきとく
みくるし連歌を人にしはし案せ
させてきれハ人もかんするなりいま
さ誰も案しいれぬさたましつれへよし

あしきをも思ひわつてしたるしるしも
なしされハとてせられまらんをれい
えさるへきにあらす
又曰大なる連歌をいたく風情をつ
くし歌なとのやうになりれともよ
きほとにをこし人に案せさせてつ
くれハよきなり秘蔵の玄義なとを
付座からす一句連歌ハなにとなく

つくゑりもなきハきえ　めでる大事
なり道信朝臣か歎冬枝をもちて上の
つほねの前をとほるに上東門院女房
あまたゐていかになといひたれハ
口なしにちしほやちしほ染てけり
といひかけたるに多くの女房それく
といひたるに伊勢大輔か
こはえもいはぬ花の色かな

とつたへたるも殊勝事なり又有かりし
東三条よ四条宮にていしたるころ良暹か
もみち葉のこかれて見ゆる御船かな
といへるに殿上人皆逐電も真實よた
ふくからぬ事敍着も今もよくしか
けられぬれそに事ある事にてはし
平よりも大事なることなりといへり

連歌新式上に曰本哥といふも前句に
引合取付事なり説哥といふも一句
此事なりたとへハ北野に時鳥をよ
ますとも西殿にても近衛殿にても清
書のとき折節郭公なとをきゝてあ
そハしける哥に北野のもりにほとゝ
きすなとゝあらハそれをとり発句に
ても平句にても北野の森に時鳥なとゝ

一句にとるを説哥といふなり志かる
を前句に北野といふにほとゝきすと付
る句あるを人の北野にほとゝきす讀ま
るゝとき尋ねハ西殿のあそハしてハ
なとゝいハれぬなり付合にされハ
本哥になるなり
又曰村雨も急雨なり村の字に二句之
雨に面なり四月八月の時分にさそるな

て春なされうちに連哥にもを庵かゝす
櫻井の連哥にむらさめをくる枚の下
乃とりふるに深山べの花みたゝく客
ふりてとせられしなり深山乃花に
客なとふる旅村雨に付庵しかくれこ
とくの人おある事なり春なとむさ
さへある庵かゝす春ふるさめふる
なり雨に次第ありまけ春の雨と正月

二月のはしめ比ゟして二月中時分三
月中ゟ春雨のつれ〲とふる人もちな
まさて四月ゟむらさめなり五月ゟさ
みだれなり梅雨卯の花くたしなと
卯の花くたし五月雨乃異名なり四月
の卯比花を五月雨にちらしくさすん
なり六月ゟ白雨七月の中比時分まで
なり八月むらさめ又ふるなり野分な

その時分之九月十月霜月なと時雨な
ま霜月なとの時分ハみそれあられふる
なりさて十二月ニ雪なとふるものなり
此次第よく／＼分別あるべき之
雨とばかりハ連哥仕べりまていへりまて
もあるべし　但雪ニ十月よりふるなり
自然ニ秋もふるなりといへり

菟玖波集雑連哥ニ曰
春雖へまいりける尽まて爰ニい
つくそくひ侍りれハ秋の雖里とや
とこさへられハ
　　　　　小松内大臣
秋の雖さとハ雲めきまてり
見を守て同行の山伏此中ニ
　　　　　後人志うす

見渡せハきり〳〵の山も麓にて
花の比法勝寺にて
前大納言爲世
いとさくら花のぬいよりほころひぬ
と侍けれハ花ある人此中に
読人しらす
かをみのころもたちもてぬに
高倉院御時南殿の上にぬえといふ

鳥啼侍るに頼政をめして射侍るへ
き由仰られけれハ五月やみのくらき
に声をしるへにてつかふまつりける
にろくをかけるとて
後徳大寺左大臣
郭公雲井に名をもあくるかな
従三位頼政
弓はり月のいるにまかせて

源氏物語巻名と古今作者とを賦
物にし侍る連哥に
ね葉の風にちりまよふころ
といふに　前大納言為家
時雨なりひられる根の十月
かまと山此梺の木に古く書付て
侍る　後人しるす
きゝもえ秋にこかるゝかまと山
とあるに　清原元輔
かをみも雪もあふりとそたれ
堀河院御時中宮清方に渡らせた
まふに蔵人永實とて御所に侍る
さりひをけを召につかへまつりける
に絵書たる火をけ残さしいつとて
周防内侍
かをみ絵まる　こきり火桶うね

と侍るに

藤原永實

花やさく梅やちらん見来那

後醍醐院御時節會の日御物うせたりけるに

蔵人清藤

御たかせを誰つかれまに取つらん

紀宗基

身をいりくに沖津しら浪

秀衡征伐のため奥州にむかひける時名取川を渡るとて

前右近大將頼朝

我ひとりけふの軍に名取川

平景時

君もろともにかちわたりせん

西山の瀧たとしまる所の障子に

瀧のいと糸くる人もなし

とかき付て侍るそはに書付侍り

なる
谷川のこゝろほそきよかき流て
貞任宗任は衣川の城をとして
をひかけて　源義家朝臣
ころものたてはほころひにけり
馬のくちをかへして
安部貞任
年をへし糸の乱れのくるしさに

又俳諧連歌に曰
讀人しらず
近付かたき意をするか東
奥山に巣かくる鷲の木としかひ
たやよそられぬ子をそまうくる
秋庭に隣の竹れねをさして
まさこるもうみ又るもうと
賤の女かぬきなしをさを立置て

こそくと汁膝になりけん
河舟の淺せもちかく成ければ
川の邊に牛ハ見えけり
水淺る馬のかしらや出ぬらん
軒の下まて夜をあかとなり
簾れ中の媚影るてなちる
夜間にふしきの事を見つるかな
驚れ尾にこそ花さきけり

水もたまれる花を見るか東
山もとれ鐙樋のすゑに舟置て
常にきく大和言葉のかたりぬれ
久堅乃そら足引のやま
玉章や同しまくまて毎ふらん
春のかりかね秋れかりかき
ちる花を追うけてゆく嵐かな
大も刀にまくるうくひす

夜行屋の下にたてゝある石佛
火あやうしとてもあやうしもなし
又弟十九に曰
應和元年八月四日五になるをのこ
をうしなひつことにふれてかなし
これ涙かはかす古万葉集の中に世間
をなにゝたとへんといふ事をかみに
すへて下の句をあまたよめる

世間を何にたとへん
あかねさす朝日まつまの花の上乃露
夕露をまちて枯ぬる朝顔乃花
飛鳥川定なきよにたきつ身なれハ
旅ねの夢路ハうつゝに無ふ玉ほこ
風吹ハ行末もしらぬ峯乃白雲
水をまつ行末そしらぬ岸の姫松
秋の田を灰にてらすをよひのいなつま

濁江はそこになかなかやどる月　新
艸も木も枯行程の岸辺の虫は声
冬ゝ陰とみゆるまも夢ぬる声　宮
下消の氷とちきる春乃池　水
蔓艸はやどる蛍はよるは灯
沼水のあはれ行末をたのむ藻
小夜更て半入ぬる山のはは月
風寒み黄む秋乃うつり蝉の声

吹風にとまり定めぬあまは猶舟
十月時雨つきぬる梅も乃色
風をいさみ色かはりゆく浅茅生の岸辺
和田の原打さらしふる波は上の宮
灯を見てあはれまる哀の夜は虫
艸のはは露に含りて見ゆる月　新
又或人に曰
見るめもなくて急をさるか、南

あふミなるいかこの浦ハいかなれハ
此台ハ保元の比近江の在廳なりける
ものの國中にならびなき美女をあひ
くしけるを國司きゝて彼女を
こひけるになさけなかりけれハ國司おもふ
やうありて見るめもなくていふに連哥
をして翁に入て封を付て此連哥を
見すして付たらんにをきりかゝたるひ

きかハ汝かなけきをやむねをゆるさと庵
しさいひけるに此男この后乃給糸を
おもひねハおもふかひなくて石山寺にこ
もりてさまくいのりけるに七日を
ミてなくく下向しける時大門より一
町ばかりゆきて下女一人ゆきあひて此
句を詠しける程に佛のをしへにこそ
とおもひて國司のもとへゆきてやれ

へことありゝなすひまりとて彼女をゆるしてかり是を観音の御連歌とそつたへまるなりといつり
又長谷寺観音霊験記に曰此連哥の事或日記にも石山寺の観音とあれとも東大寺珍海已講所進東日本感通傳に長谷の観音といふ又昭月上人此観音験記にも長谷寺の利生とありまされへ

件の日記に見ゆの俣なる竜しといつり

○

連哥さく先こと上に曰哥にも六儀とて六の姿をかまるなり連哥にも六儀のこゝろことにわるへきなりるにあるして大旨顕を竜し

風をへ哥のこゝろ

名をたゝくまへうへなし　郭公　心敬

是は二條太閤様をひとゝきをよそへ
て称揚志まゐるなるべし物はそへてなれ
ころをおしえを風のなす成べし
賦　かぞへ哥のこゝろ
出る日は西方の霞に成まかり　救済
是はおこと仏をくだりて通じたる
成べしこまやかにこゝろをとる賦の
なる成べし

比　なぞらへ哥のこゝろ
下もくち地かにましける宮ゐ哉　同
是は散の字を塵になしてなぞらへを
る比なるべし
興　たとへ哥のこゝろ
五月雨は峰の松風谷の水　同
是はそのおもゆへづきたるをえなし
哉なし　たどりたとへたる真なるな

る庵し

雅　まくこと葉のこゝろ

なれ竹も花の秋にもぬにより　門真

見るもまくちよいひたるなりん得ゑ

くらさてましくいつる雅なるなる

庵し

頌　いえ井斉のこゝろ

花植みがゝる玉れとこきりか東　成阿

見るほめこさぶきまるこゝろなり　頌

れ句なるべし

又曰古人れ句おく

幽玄の句

袖をうきさをへ名れみかさまて　順覚

雲月暁のうへなる山の雲かをと

ともにをまむといひしれく山

なき孫よひとりぞむさぶ柴の庵　救済

古郷となるまて人ハ都をすて
萩ふく風にころもうつなり　頓阿
風のをとまてさむきゆふくれ
秋になく人をまつにもうき物を　救済
わかれてもへハなこゝなりけり
松風も猶いましへをのこさらん　同
長高の句
かそふへからに霞むもそふ之

春雨にもゆる蕨の手を折て　順覚
あまりにとをき山にまかれす
わかさきわしの高根や二千年　周阿
乃しれる弓と文とへきこえけり
雁かきかへる三日月はまへ　良阿
日をなかくなを柴の戸は中
此山は西にそれする住ゐにて　信照
川のよとみにむそのこれる

えよし野の花ちるまではきそ桜　十佛

有心の句

まきむく山のさむき夕ぐれ

ゆきくて此川上るさともなし　救濟

これよりはまさるんになりやせん

わかのちは世乃秋のゆふぐれ　良阿

ぬしこそしらね舟はさほ川

なかちゆく木津のわたりに日はくれて　救濟

人はしらて谷はしらさる

風かなるつま木の山乃節夕に　同

たやまかなるやとをとさなるらん

ともし火のあかき色なる鬼を見て　同

一節は句

涙の色まそではくれなゐ

何ゆへにうくるうき名の立田川　信照

かさへるうをき峰のもみぢで

人こゝろたもひたもえぬ色をえて　同

平野こそ北野よつく森となれ

難波津よりいとをさつくし路　十佛

まつ川日影をべ舟ヽて来まかり

あふまでといひし命のいきれ松　救濟

心よりまくるきことま志ほじみて

入江のみるでかりきその中　同

寫古れる

雪をあつめて山とこそすれ

冨士の根も人のみるもゆかしくて　順覚

上下をさゝむる君かまつりこと

きえすなかるゝ賀茂川の水　善阿

いつれかれ不き筆の跡かな

絵よかゝる花もみ葉もときはにて　良阿

みじか夜たすれへ初あかしつ

わかたのむ社ハ御名のかものあし　家隆

なといつまつと見さるらん
寺ちかきあきかの里に住なから　十佛
強力なれる
ふしたかむよりえゆるふけゝき
これそ此神代久しき宮ゐしら　救済
いのちたもへつまぞ見しゝき
老のちふり分かみの子をもちて　十佛
かねてそふべき日をまちぬかな

郭公なくべき月はさつきにて　信照
弓矢ぞ国はおさまるとはなる
ゆくしぐれ秋の山田をかり上て　周阿
鳴たづもたのがねぐらをいそくなり
霜をきそへてくれぬこの日ま　救済
面白きる
こゝろたけくも世をのがれぬる
みどり子のなたふをごまもかり捨て　良阿

砧のをとぞたゝくきこゆる
秋さむき峰の庵に人をゝきて
木ずゑにのこる秋の志ら露　頓阿
山のはは松乃もとより月いでゝ
いまいとしこそ立かへりけれ　信照
老ぬればいとけなかりし心まで
人のかずこそあまさえされ　救濟
杣木引まさきの綱に手をかけて　同

といへり

○

大原三吟に曰

松し免ともちる木葉なりけり　宗祇
いつもみる人の花にともなひて
たのしむもまつかれまの友なれや　宗長
このもとをきこえそのたにさ山
あふくま川の水は月か華　基佐

ゆくすゑの秋いかならん老のそて
わかれちハもとそもさうよひろくて
うちえへてゆくミちのくれかりまう
文字のかさちよ似るるうきき雲
とふ雁の山ハなかたよかけききえて
たかきをてし筆のそてしの残るらん
待人のをとうるもきハむわかなミる
風よやならん雲ハえあしさ

祇　長　佐　祇　長　佐

一葉よりうこかきとんさをたちて
舟たさの山さハとをくこきわかれ
えるるうちよ花よ残なり日をくれて
こゑのかきりやなきさつくさまし
おハぬ月よえふのなけきもみをきれ
秋ちかききミよかくれの不そをたす
ぬきさをてうつり香もなきふち衣
いしをあハめてたよりよそなす

祇　長　佐　祇　長　佐

こゝえせぬながれのをゑれ横てみ　祇
いとけなきもつゐにやいらん法の庭　長
程ふへてこそもえしなきかあと　佐
のかれても世のうくちこそすれ　祇
みねのいほ立出ぬれハ袖れ月　長
ちる花をわかすゝ深まなけきわひ　佐
おまあへハ出れもさくらん略る
いのちに似たる入あひのかね

物ことに跡なくなるや峰のくも　祇
咲花もよそゆく雲のたくひにて　佐
玉をのむてふこゝちこそすれ
いひしらぬ言葉の光りくもらぬに　長
かえまさる艸のおさ露志ろたへに　佐
あまねく人をわもひこそすれ
そのかミにふされやなりしかれ佛　祇
世をてらす神のめくミれふかき日に　佐

水わたちやまれ色そかはれる
なき人を送りさとつれハ袖ぬれて　長
つれもなきことまさある隠家よ　佐
とハれぬ中をなさけとも志れ
かられがハまく一もとちのみちなるよ　祇
掛さく峰のあま雲たちさえて　長
なミ營るよ志川かなる くれ
さ比かくすあまてる森よなかうひきて　祇

年のうちよ春をこえぬる山さとよ　佐
見なれぬたきそ袖にたちまる
風ませよよるちる花の色くちて　長
みよしのやよしなき根ゞ身よこめて　佐
この行を思をなよとかハせん
志川かつむそのく菜の暮日よかれて　祇
もかなやいのちなよをまつらん
か免よさを花れ歎日よさたて　長

はかなきものゝかくちなりけり
風はさへきえてはなさくちるはなき 祇
とはすかたりにみこそふりぬれ
うれしき火をいけるかひなくきえにし 佐
たのむかひなき夜半さ衣
こゝろさへ日をふるたひにつかれきて 佐
たもかぬるによひろふそまくり
志ものほる水うきさはに風たちて 祇

なにこれ玉の枝やおるらん
つほむよりむまにとうるゝなきて 祇
已上
又端書に曰基佐の云集にいれしを用
ひ作者ハ誰人を用ゆへくはや答て云
十三代集より以来ハこのましからす
作者ハ俊成卿定家家隆有家通具通光
なとの其詞をうかゝふへし 万葉八雲

又しらざる集などハことくしくて
其味をしらず其後の新古今千載な
どの歌をよましめて此道の心よさ
べし意の旁さりて自巳此月をふる
がごとく義を種となして此道に入
べし詞ハふるきを用ひ情ハあたらし
きを用ゆるをその肝要とさとるなりと
いへり

連歌老葉第一に曰　○
なくさめろさき此世なりけり
古郷も老木の花にまつりの風
宗長の注に云是も一年連歌合の前
なり何様にも沈思とれるゐ大なる
見え侍る筆につくしがたしまこと
る人の心れあさたふかきによるべし

又いはとむねうちさはくなりにて
命はゆふへ花はやまかせ
長注に云十四字のうちにかゝ屋にこそ
いりをいひかけも風情いふかゝりなし
下れはなほ大切なりとそ
はかなくえゆる袖は家つと
花落る山は浪を名残にて
長注に云花は落て浪を家つとめて

しきにや前なるはかなくえゆるといへる
わかれ付へきにや
はかなの春や何にたとへん
朝露のきえぬ風にも花ちりて
長注に云詞のつゝき作意いふはかりなし
是も連歌合せるなり
又第二に曰
こゝにやたてん袖のわかれ路

蟬の羽にうすき衣かへて
長注に云袖のわかれぢを花染と夏衣
のわかれなるべし袖の別路あたらし
き付様なり季にやたてんハ蟬なる
べし

みてれハかくることわりを志れ
さやかなる月の盛ハみじか夜に
長注に云天盾をみてるをかくといふん

なり世の中皆此理をしれといふ義
なり理をしれといふ所なきをしる
べきにや
又貞三に曰

むさしのに秋此幾日を送るらん
かやうすゑの名の此月
長注に云此下の句大切此事にやいへも
く哉佶の次に云出されしなり秋の

幾日を送るらんと前句精粉いえせて
かやうま葉の有明の月まことにやさを
くとして志らも幽なるにやばんも
直にこて侍し

露こぼれぬる花の草村
夕風に虫の声まよふ里古て
独にたえし　き野路の秋風
虫の声にゆくうさ着て宿もなし

長注に云ば二句又ん云葉艶にして
虫の音に行方くれてさらにいひの庵
らる庵きにあらす

いかなる人も罪をのかれし
猟舟に心をよする秋の海
長注に云漁舟の面白に殺生を忘ぬる
にや我心よりみる人のこころを察せ
ず一句に猟舟にんをよするなど詞れ

よせ類なき物となるべし
身をたどるうき燈を冷し
黒髪も今は霜夜の秋更て
長注に云此句又見え侍るにやくろかみも今は霜夜など云義つた類やは侍るべきさ
又身四に曰
うらミいくたび身につもるらん

木の葉ちる人もかよふ山里に
又みる夢もやがて覚けり
一年は花のあらしにちる木の葉
霧と志る身に吹風は物かなし
命まつ間に木の葉ちる山
いく度か笹の庵はかゝるらん
志られあられは曉のこゑ
さひしくむかふ埋火のもと

きかゝる時雨あはれのまさる夜に
長注に云此五句ハえまるまでなる處
し毎は感情あさかゝす吟味あるべし
風なき枝をわたる 村竹
なぬに霰ちる夜の月をとて
長注に云竹にあはれは誰も案するな
れとさ様ミによのつね此事にあらす
又第五に曰

つくくまていきもくるしき
杖よりも山路なき友を力にて
長注に云杖よりも友をちからあはれ
しくも侍るにや
やすむ木陰の水は涼しさ
山こえし駒を蘿の蔭に飼て
かくる太山にやどりぬる 秋
旅なまく鹿のふし所も便にて

やすらふ里をいつる旅人
かり枕むすへハ月ハ落る夜に
長注に云ハ三句又見え侍るまでたのかる
ハさま一ふしありてそろこころもある
べし
物おもひ鳥獣もしるらし冬や
深山ハ雨乃秋のかりふし
戸ほそをしあふむかふ大空

晴くもる雨のたひ人出居して
もろともに急や限と立わかれ
かり旅の山ハあかつきの雲
こなたかなたハ山水の声
まよひ旅する高根に秋の夜を更て
艸もむすびぬるいくせん
峯高き雲を一夜ハまくらにて
長注に云ハ五句又見え侍るべかりにや

感情余あり吟味を廻し
　なさけなりける笈をも忘れす
旅枕ありかたく火にまどろみて
　我は一夜の恙もわすれを
　埋火に宿れ旅祢も長宗にて
長注に云此二句たなしさまなる廻し
焼火にまどろみて笈を見埋火に祢て
我は一夜の恙を忘れしといへる感

情かぎりなきにや
　あさくもちぎる事のかなしさ
艸まくら野寺の鐘に起出て
長注に云野寺のわたりに旅祢も法の
縁も侍りぬれと又暁の鐘に起出つれハ
浅くも契る法とかなしみ侍る哀あさ
からす又誠もふかし
又青六に曰

さても此身に何とかくさん
天地もあるかぎりなる物たとひ
催ようふかき能をとハまし
まよひきや昔もかくる意此居
これハこゝろも空になりけり
いかで身に物たもハきる人ならん
あらすんやかなりゆくらむ
竹木たにえしにもあらぬ物たもひ

ふとおし免ぬる居とおやらし
いかつり身をなき物や意ならん
長注に云此五句えゝするまにや句此
風情毎句有人艶なる物なる遙し能く
人を付らるべし
法もこゝろ此さかりとそなる
貝鐘のこ意もおふ夜と恨にて
長注に云意路乃執人たそろしく

春よりゆく虫ハあハれさ
ひとりぬる霜夜の空に秋更て
身にしむ風よすがら吹あれ
秋も更人もつれなき夜こそに
なかき夜つくまちそ侘ぬる
こぬ人も見るらん物を空ハ月
長注に云此三句又艶に哀もふかく
等閑にてはなれかひえぬところハ

略なり
　たちゆく雲ハ跡も残らず
思ひつる文を雨ふりになさともうし
長注に云前句立ゆく雲ハ跡いつれも
取成にて付らるゝなるべし立行を煙
とりの跡を文にとりなして雨ふりに
なさともうしとなり
又第七に曰

あはぬもふかき契とそなる
いさつゝ帰る夜にしも名の立て
長注に云あはぬも深きちぎりあはて
かへる夜の名にたちてふかき契りに成
侍るへ浅からし付様奇特にこ
あさかりすとてそひそてんかは
うかれ来てそれも形見となりやせん
何をなごりとなくさめもせむ

つらさこそれもへい人は形見なれ
長注に云比二句えゝ侍るまでにやつら
さを形見うきを形見めつらし作意
にや
思ふかひなく見やるなまし
あはて名のたゝぬべかりは何かせん
長注に云あひそて名のたゝさらんこそ
思ふかひなかりめあはて名のたゝぬ名も

なしとにや付廻り一句艶にしかもめつ
らしきなるべしか廻りの所に心を
付て見侍る座し
　やる文をいかてかくはちかきらん
老くはふかりのうき名なかきをや
長注に云見え侍るまでなるべしるれ
作様いふべかりなきにや
　水も祢ぬるやうつる夜は秋

露の間は菱路によそむ我涙
長注に云水もぬるやといふに涙はよ
そむといへり一句艶にあはれ浅かす
人のこゝろはかなる世の中
えかなしやかねをなるへしるへ山
長注に云比翼連理にこともり羽をな
らへしる部山といひつゝてしかも
世の中をおもひ入侍るところ深く妙く

又方八に曰

かたミなて都の方はみえよかし
ひとりぞすむ山里乃菴

長注に云山居にても都の恋しさん
あはれも浅からす

もとのさとりに身こそ遠けれ
獣のそしるや弓にれそるらん

長注に云弓に本末あり前る大事之

獣の弓をえてまけなしれハ弓お身に
る獣遠さかるなるべし本の悟る獣の
弓をえてさとるなる庵し是連ゝ前の
一躰なり

罪いかにとも猶かしまし
ともなひてうれへを酒のたえふれに

長注に云沽酒の家を教ゆるものまで
五百生は罪とやらんいふ事あるにや

愁をさけ孫重く
又寛九に曰
　去年の秋にもへハ菱のわたりにて
難波の芦に春か勢そふく
長注に云菱のわたりに難波面白き取
合なるべし
　一日の菱は身をなたのミこそ
世の中はきのふもむなし　明日もなし

長注に云一句は作様珍重々々
　はかなひわつらふあかましの山
あかつきの嵐に老はきえわひて
　いひかさたこそのちは春なれ
誰もこいはもへと老の明日まちて
　人をうしとハいかではもなん
さかむなよ老のくせなる物恨
　身にふる事は恐へる哀さ

老ぬれハ又いとけなき我なりて
われむかりにやつくるへお
老か身に誰もかきりハある物を
隔るや長き恨となりぬらん
とを山とりの老はいにしへ
長注に云此六句ところ見え侍るは
様いふべかりなし
起ているらんあかつきもかな

夢路のミかつるむかしハ恋し
長注に云前句極樂世界の事にや付る
こゝろはさてむかしにいつしかや
となるべしおかしき付様にや
れもふ友ある日こそれしかれ
あきハまれなからん事も忘ぬ世に
長注に云世の中は人まれもくかくの
ことし一句は作意殊勝くく

又ある日
発句
愚作を記しやつさよし再三の事な
りしをとかくいなひけれと政弘志ゐ
て此義なれハ是ふ筋目をこそあり侍
り詠草また発句を先書てあるへき
事なりと老師専順やをられけれハ
そのんもやふりなくて端なる句此

まへに月の秋花此まさ哉とつらふ
まつりしをかきつりぬんも月されハ
千くよ物こそとよめるハ陰の気なれハ
なるへし花されハんもよなそひ
しハ陽の気をうらるかなり此二より
万も生する物なれハまてなん陰陽の
んある句を置て一部を綴侍る所ありり
正月一日独吟連歌よ

月の秋花の春立あした哉
宗祇の自注に云立春に年中の事を
おもふなるへし
宗長の注に云此発句余情かきりなさ
まやといへり

○

種玉庵宗祇法師独吟百韻の連歌に曰
かきりさへまさる花なき桜かな
しつかにくるゝ春風の庭
ほのかすむをちの峯に月出て
おもひもわかぬかりふしの宿
こしかたをゆくと夢はかへるらん
旅人見えぬ跡へはたるあさ
霧まよふ尾のかをとかにあくかれて
かるゝもしるき草むらのかけ
鳴虫のしたふ秋なといそくらん

ウ

そのまゝにおし難かたけこゝろ
月よくる雲もなきまで月見て
清見か関戸なみよあけゆく
なりきてか角田かはらよ又も孫ん
そなれハつゆしともさとる人
契りきやおもはぬ難山の花のかけ
世をのかれても素はむりまし
身をかくさいほハ霞をたよりまて

きえんあふりのゆく恋をそまつ
もしほくむ袖さへ月をたのむ夜よ
こゝろなくてや秋をうらみん
かくるなよあさことの葉の露のこれ
まれをかさひてあかれともみむ
二
契りてもえやハなへての草の花かる
かくりこんをもおもはぬふるさと
いかよせし船出そあさも雲の波

なきさの海をわたるまよひ人
もろこしと天か下とやつゝくらん
きめ八のそけき日のもとをなし
さくら咲峯は紫雲にまきれて
うきくもをとめる山きものさと
月落てゐるのこゑくあかる夜に
つゆなこりなくれきやわかれん
身にしめる風のみ袖はかるさまて

まえこしかさは夕にそなる
れもふなよ忘れんもこそんなれ
つゝきにのミやなつはさるへき
ろあるもかさへのこる蓬生に
まる人をしる花はあかれさ
れりにおふ露も袖はいろくに
めくらんそもわかぬ春は野
猶そなるかふもむなしくるやせん

こゝても法は遠きわか身よ
齢のミ佛はちかくたやなりて
むねなる月やミてるをもえん
霧そゝる山はなくさめ物にもひ
松をは秋れ風もさをすや
人をたかんの枝をきれぬらん
門ふりそれたえぬさへうし
瓜まこるうけも蝉声も幽かまて

三
苔まいくへの露れ夜ま
起ぬつて夢をうちわふるをれ夜ま
月さむくなるありけれを
あしきれもうきふしあるくねまたて
てろくまさえく波風
山川も君まよる世をいれかえん
あやうきむや民もをるしき
植しよりたのミをつゆま秋うけて

かりほの小萩うつちるもなし
衣うつ夕をくすな雁のこゑ
むなしき月をうらみてやねん
こちぬよれんやりつる雨ちれて
身をしるまさへ人そ猶うき
忘れねといひしを何ときてつらん
かせれたよりもかくやきゆへき
花もえやちるさくまれの音こそよ

日なかさのミやふるさとれ表
糸ゆふのありなしをきてわか世まて
かをみよくるあまれつりふ袮
なか見せん月なまくれそ波れ上
そくまや秋のよをあかしかる
遠つまを恨まかへを鹿なきて
われもひの山まちをやつくさん
そらふなよいれくか塵のうちたちぬ

みどりハかりをいにしへのあさ
植をきし外も草木も野へまして
かせハさなへをわたる沢水
こゑをはに出しもそかなさふ蛍
いろにこそハえぬものかな
ナ　まつ袖になせハかきみにひかるらん
ちるさへかなしひとりこそ山
をのか世ハかりね別にかきまとて

秋をかさねんもいさや玉のを
身れうきハさしふるえうり長夜に
見えし袂にて月やゆくらん
よしさらハ夜もしられよ袖のうへ
まくひさにあるかたもひなをしハや
誰さてか嵐にまえん山のかけ
かくハ雲ゐる岩かねみち
落初し瀧つ瀬いつこよしの川

むやくのことをなくさみてそさふ
物ごとに老らん此あとをもなし
めてこしやとはあさぢふの月
野への露も袖よりをきやならふらん
山こそゆく急ぎがある中
つれもなき人は此世をたのまめや
志ぬるくをりは哀まえまほし
蓮葉の上を契りのかぎりまで

ちるや玉ゆらゆふぞちれ此雨
雲風もえたてぬ夏とさむる夜に
わかが手なれやふくるともし火
といへり宗長云此百韻は五ケ月まで
思惟せられし事なれはいかゞ屈りの
名るも出来べきを末代此鏡なれは書き
やすらかにつけきるものなりとい
へり紹知云此百韻先年周桂講釈あ

三度の句の相傳の指吟に極め常々云
畢元亀辛未初秋中七といへり西順云の
百韻ハ宗祇七十九歳の三月より七月
まで五ヶ月のほどに門弟遺誡のためよ
首尾ともによやすくとつけ給しなり
則宗長注を書し給ふ末代の
亀鑑の正風鍛の手本なるへし予
多年の指吟を師傳とし晩暮詠吟

得んしいさゝか邪正を覚悟し給し
の風姿を得んし習ひ学ともその
つゞら正風甚深なる所をも志り其
さゝひにいたり侍るへし元録五年十
一月廿八日といへり

○

連哥手引の糸の序に曰賢舜より連
哥より合の事承ハ和漢の才学よ

て連歌を付る事は涯際もなき事と
只古今後撰拾遺の三代集い勢もの
かたりなとハ歌にこそ云に及は
す云葉書作者の名までも連歌の寄合
なりすといふ事なるをよしや付る志
るゝ間よりおひとさしていれを志る
し出侍らんとも志らすされとも近代
名匠達の付来しも寄合おほく此句の

あれは書付侍る歌を本歌本説
にて付るに二の様ありとなり一には
前の句に其詞をとられとも其の歌
心の似たる事あるとき其歌の云葉に
て付れはその歌此んになるなりきをさ
へハ

月はかくしても又やさそれん

たかなしや老にえたえとのわかこゝろ　祇公

此句も古今集に老らくのこんとしり
せハ門さしてなしとこたへて逢ざらま
しをといふ哥のこゝろなり前の句に
其詞もなけれども心ハ此哥のこゝろ
なり老の来むといふこゝろバ門さしてかく
れてあハしといふなり此連哥に付る
心もさ庵りに身をかくして老にあハ
しとするとも月こそ日ことに老をも問

るべしさるうへハえりなきかくれことや
と付るなり哀なる哥連哥なり又云
露にて付る一の様なり
むちをの上に露もこぼるゝ郎
日ぐらしの鳴夕風に月出て　祇公
先も蓮といふ露さし出たる句なる
哉に日晩と付たり金葉集の哥に日暮
れハ蓮のうき葉に玉こえて涼しくな

見ぬ日くらし此歌といふ哥のこゝろ
なり蓮に日晩ハ更に似つかぬ寄合な
見さる程に詞にハ大形におもひまかひて
心を深く付たり此蓮の上の露に月の
やどりけるを涼しくながめし山に日
晩の聲する比山風涼しく吹て蓮のうへの
露の月影もいとゞおもしろくなりし此筆の
姿をよく〳〵おもひ分てきこゆべし

出る詞によりおもひなかしてふかきこゝ
ハ付られぬものなれハなり　宗牧
といへり

○

連哥至宝抄に曰それ連哥ハいろ〳〵
むつかしきならひ侍れども先一法
作意肝要にはいかに物をきりはても
さくいなき人の連哥ハふしくれたち

はてなようらずはいにしへの人やさ
れしも五尺のあやぶみに水をかくるが
ごとくぬれくとさへやうにあるべき
虚には付合の事さして定ることなき
べからずは古今序にも人の心を種と
してよろづの言葉とぞなれりけると
有是は只今も心に面白きと思ふ事
を作せ出されはへへをのけかしふること

ことの心にもお叶は唐土にも日本の事は
ごとく詩をつくりて為獣艸木は名四
季哀述懐の詞等をうひ置はさな日本
の人は心におもお遠はずは又詠事大槩
は定家は事を読べきまうをあらしを
されはその言葉にもんなあるしきを
もてきりそし詞なふるきをもてもち
ゆべし又いそく和事に師匠なしふる

こと歌をもて師とすると法度は聞ふる
ことの葉を法覚えなされはて奇特乃
法作意をわかせ出されはへべのこる所
なきと法連歌しまでは昔の人れ歌とて
ミなくよきをまるあらず古今集をえじ
めはてあらく れ詞をも當世をとなえら
ひは専わかく法度はこのまさること
も詞のつ事風うまよりはてよくき

こえはと定家卿作せられをられは御
茶湯なども歌の道にわれなし事とう
けたまはり及はふるきき道具をもてん
をあそはしくおそへされは事右にや
は定家卿の心にお叶はをや連歌も茶
湯も其ときくにまさくひて一様にまあ
らずは昔よりへさりきらひもれんくに
きふになり付所も一派とこまかになり

やはふるき連歌と云ふのえんれいを
とり付所えたるなれども法入はへつる
只今はゆり付とてさうひや事ならぬく
法度はをゑに書付やはしるゝに連歌と
歌一首をふたつにわけ書つゞけ祢百韻
となしやはさりなからし歌と連歌とお
しかもりめ法入は歌は上れる句にそのん
きこえはり祢ども下の句までことをり

に下の句れんを上にてことをりやは
事ならぬく法度は連歌と一句くくに甚
ことをりなくてる叶はざる事にては
志かれば一句れんましるにして姿詞
幽玄に前句へのとりよりをつゞれざる
風りに又云句めかけをなれはごとく
なさるべきより外の事あるまじくは
指合の事は執筆又甚度のこうしや

此法仕事にては間さして法んにうけ
られはハてもくるしからずは又発句
脇第三にんもち法度は又てにをにおし
なかひ法入はのちにせうく書付申は
又斉の座に本意と申事法度はたとへバ
春も大風の吹大雨比降事も法度はへ
ども春雨も春風も物さびかなる座う
に侍る事本意にては又春の月もこと

にみじかく覚えは事も法度はへども
いかにもなかくしき座うにやなう
へしは又花の本意此事花とべりれし
出して申はハ桜のことにて法度は但
桜花と申はてる正花にハもちひずは
又花に桜なきも付すりは去ながら花
をと引えなれ同じ面に桜を侍らずは
正花と申てその座に貴人功者なうて

る平人ハ斟酌ある事にハ一折のうちに
て花を肝要に仕ハ間よく思案をなし
て仕べき事にハ花にはじめ中をとり
の心もち座ハまづ年のうちに花を
待折節より花のあらましをいひか
たらひ春さちぬれバ梅がえに香比つ
ありて花をそけなる事を思ひやり
又木のめ春雨うちそそく比にも今い

くかゑてか咲出るをもえんと待折し
も遅く本ぞ名の外に色めくを又
てな一花用られバ天下此春ぞと知と
いひ或ハ都の外此家くに桜咲も残ら
ぬよしをきゝてハ花見車のあとさえ秩
をつらね終日の往来も絶ざるよそおひ
或ハ山里に散り置花も咲るりと告来
る使あり取あへず馬にのりとさ木の

下にいたりてしさかな盃とりくのあ
そびし此日のくるゝをもしらず帰るさ
を忘れつゝよひは花の下臥して朧月
夜にしく物もなしとうち詠めし日も
もとのしありの頃をかへてまだ見ぬ方
此花をいさなふまゝに曙の空かなく
れ雨そぼふるにぬるゝとも同じくは花
の陰に宿らん事を思ひ立わかるゝあし

も花をてごとにおりてわもひくの家づと
などいひて玉章しんさくなどをそへてわ
くりみとし比喜伝ざる人も花の盛りにし
とひよりてなふこずゑは日も暮とふり
なん事を思ひしもしたきうつりゆけば
あざみちり行花をみてもよの中のた
かなき事を歎じいづくにかみのこれ
る花もあらんとなしぬ深山のおくな

ど猶入に青葉がくれの遅桜をみてし
初花よりもなをめづらしく思ひしも
蓋えいれハせ先ても忘れぬことて
夜を花の色にそめ夜がへの日ようつり
ゆけバ花の袖をぬきかへん事をかな
しひ又木ども若葉のみ葉にみゆる
をも花の名残ぞとおなが免郭公のこ
川音を聞てもなを花をしのぶころ

ぞへのミ又夏の夜ハ短き事をむねとし
て或ハくるれバやがてあくるとも或ハま
だ宵ながらあくるなどよミやハ又明
るをかしましきほど鳴ハへども稀に
きくほどしくなく待かぬる風情に候
習へしハ五月雨の比ハ晴曇月日比頃を
もみずる人の通ひもなく水まさん
くさして野山をも海にみなしハ

風雅に住ば事なき意にては又秋も常に
見る月も一入光りさやけくも面白
き風雅に詠め四季ともにをく露も
殊更秋はしげくして草にも木にも
置あまる風情に住ばさて秋の心も
人により所により賑はしき事も
侍はへども野山は色もかはり物さ
びしく哀なる殊更秋の夜はなが

きにもねかぬ人も侍はへども暁
のねざめに心をすましこしかた行末
の事などを思ひつけてあかしかねき
るさまざまには又冬もなが雨など降事
も侍はへども時雨のなき意として一通
りふるよと見ればはるゝかと見れ
ば又ふりなどして日数ながしむらく
しぐれさえくし月の行来も出そざ

る一しぐれ板屋の形さての庵などにき
あかましき躰仕来りゆ又雪に深山の
端れく山里などにふり積り爪木焼木
の乃も絶て旅人の袖も拂ひかぬる
折節も都のそこにも珍らしくなり雪
うちを雪など興をもよふを屋りにひ
なりへしやゆ又旅の本意とやいはとひ
田舎のたちつかにて仕ゆ連哥なりとも

人を都人になしゆて仕ゆそしめて旅
立時にお坂山の関をこえ或は淀の川
舟ゆくを急きくおひ屋り海にこぎ出る
折節に都の山を跡にかつりえてなれ
かしくさのふたふかの旅ながら月日を
送る屋うに覚え難路の山路の旅ねに
も古郷をこひおもひ草のまくらの蓑
のうちにもこしかたのことのそえ

便りおさめぬれバ松風浦浪の音を聞
く人やりなしぬるながらあるくさ来
ぬる事をくやしみかつるさに姿もや
せつられ麻のさごろも志ほれたてを
るかりに志たがひしかバ又恋によむ字
恋見恋待恋思恋逢恋別恋恨恋其外さ
まざま法度はいつれも人にこひらるく
かりにある仕つずはまげきく恋さるま

だえぬ人を風の便りにきてよりお
きふし物おもひさなりありぬつてを
たのみ一筆をも書へまほしく思ふ
ころなり又見る恋とさる思えざる恋
ぶりに輿車の下簾おひまより見えを免
又ハさる家の志とみ几帳のかけよりお
のかに見えしその俤忘しれずしていか
なる中立もがなと御ふんなりなり又ま

逢ことは年比契りおきても何かとさゝはり
てうちもぎみ川の夕心さたのめをく
文のかへしなどえ侍りては心もあくがれ
きのふかれ日をもくらしかねひとひの
うちに千年をもふる心地してまち侘
るおりしも萩の葉かれば伝えなきく記の
まねくをも君が来るかと思ひゆふぐれに
なすれべさしぬかほにて門の外に立侍り

ひよのつねれきぬの袖にもそぼちたきなど
して夜の更行をかなしひまい宵の待
れ者はおかぬわかれのなれこそはもの
数にもあらずと候侍るも見たりし又志
のぶ恋とはゆへあるにいひ寄てよそ
其主も心とけつべきおりし或は人目志げ
く或は世のきこえをはゞかりよなくも
通ひても人にあやしめられて立帰る

風情又ハ一筆の玉章にもうき名やもれん
とおもふこゝろ是恋のぶ恋なり又あふ恋とは
年月のおもひの恋をとげてよひハあき
その人をしげめともし火ほそくと
かゝげ置閨のうちもよしあるさまつく
ろひなしおしも月ハおのかたするにち
ひさしわりてを先また妻戸の服に
立休らへつるきぬの袖をひさ又国のうち

へいざなひ入てもまどろちつけなれべたゞ
ひよえぢかハしくかりけなどもさりあへ
ずおふをさむしろハうへに枕をならしべ
ながらまで下紐もつれなかりしをさや
かくといひよりてやくもうちとくるまく
まさて是ごとなど浅からぬ情おもひやる
べし又われの恋とぞたまくとひ来る
人も宵によそめを忍び又えつる比ふひ

にあひなふ契りなれバやがてわかれん事を
かなしミ秋の夜乃千夜を一夜になずして
ぬるともあかくまじき中をいひかはるの
こ恵待の暮れぬるぞのをいそく事をうらみ
今宵わかれてまたいつあひみんことも覚束
なく袖の涙せきあへぬまでに傾く月も
入がたになり志のゝめの雲もんぞそくひきわ
かるゝまでよちりしなくきぬ〳〵のあとを

志たひえ送りかへりてまたねの夢の面影もた
かなくんなりざる後朝の袂にしの袖
も及ばざる悲しくうらみの哀とも殊
更なれきにやまゝ常ゝ契りをく中
もいひなしよりも絶えつることを恨みて
い秋よりまさりまさる人にうつろひぬるをバ
世の中れいさしてかくこそ定物なれと
数ならぬ秋身をうらむるのゝなりまたハ

ひよくれんりを誓ひし中にもむなし
くなりし後までもきさうらそのことの
えをつらね又は二度かゝる人はたがひのう
らみやむことなし又たきふしそひな
るゝ中にもおしのふしをいひ出して
うらむる事もあり又はあまりつれな
き人をこひくてむなしくなる人も
そのれんれんをのこして物の怪となり

そのんをなやまし事たえし此外事に
ふれおりに随ひてうらみのかずさまざくや
つくをべからざるものなりといへり

○

無言抄下巻に日面の連哥にも山類水
辺植物降物旅などにはなる物にて
いかほどもかろくとやるべしまたへは
席かなりにもこゝろうすなんなく

正風躰にあるべし
又曰一順の句などもさのミ沈思して案せぬものなり大かた前への句ぬ句ならばかろくとをべし席にて人に待っねられても無益千万なり再篇もれなし
又曰儒も佛も哥も只性をべき事文学も窓に螢雪をつミあつめてもまなびえぬ庭うにをとべし虚無自然乃理をしるといふとも世をのがれても心をとてかぬる躰するべし薪をとり木の實をひろふ難苦をへても法の乃にも入らされんをなげき風をつきへ塵をつく大和哥もあふげきもいよく高しされはいよくかさく何につけてもいたりかさく力のほどみれつゝさなくをろかなる

歌は此句作これ第一の器性なり其外は
つれの品にもよる事なり
又曰老後の句を幼少なる時の人詠ば此
歌にはさもあるべしこれせいのつきさるゆへ
なり器量をめぐらしいろ／＼にたく
みなるは老の句に似合ざるもの也古
人の庭訓にあり見捨がたくて是をの
せるなりい此の間にそのかずに入て

うきよのさまをあらましになし侍る
事誰も身にあはれなるさはひなるべし
又曰猶るやねりそといふ言葉を定家
卿の俊成卿にとひ給まへは奇によむべ
きた先にやとてれ不さに折檻せるさま
ひしとなり三代集の言葉なりといふ
さも〳〵しあしき事は無用なりある抄
物に古今によみきたれはさてちるそめて

たとへらなりなといふ言葉は免まし
ことあり昔人もかく一ふしある言葉
なとよみたまひけれともその作者に
よりてなをも手柄のやうに笑へれもよ
ろく侍り季せにをよび心も詞もつき
なき身まして後代までも人のごとく
さの種になるべき詞なといひ出しき
らんはくちをしかるべし用心を遂し

又曰執筆十條の事一には衆人愛敬をも
つくるべし二には親疎好醜を論せす平
等の心地に住するべし三にはその席に争
論なきやうにとりあつかふべし四には指
合をよくかんがへ越度なきやうにすべし
五には雪月花のあり所を心うくべし六
には貴人宗匠等の異見にしたがふべし
七には文取披露ほと調子度数のお應

まもるべし八には懐帋面手に等たしな
むべし九には五常三綱をこゝろにかけて
ゆんぎんをまもるべし十には法度形儀
終日みださるべからず右此條々よく意
得べし
又曰連歌會席作法の事其席に至事
ゆめ／＼聊尓に思ふべからず前の夕より
心をきよめ終夜古歌物語等此詞をお

もひつらね内外此書籍和漢の古事をも
心にきざみ披見して了解より
衣裳をかひつくろひ出座あるべししかハ
あれどもその身より美麗なるも似合
すその位より卑劣なるも見ぐるし其
ほど／＼を分別して人の目にたゝぬやう
にいでたつべし終日此形儀等もかくの
ごとしされバ古人のかさをかられし中に

雜の禁句せぬ所はよくたしなむべし
といへる吟雜談等座中さはがしく隣
座の雜儀なり貴人児なとの同座をい
たし吟をへらす連衆自他ともよん
をちつかす称ふりあくひ大酒座敷をさ
けく云事をこれたかに出して人の耳
にきちてんをうかさき事又ひきく出
して執筆にそひくさゝる事扇をなふ

まくにひらきてつかひあそびの人まで
もおふさまなる事誹諧かなどをな
ましてさはかしきを用捨あるべし已上狼籍
至極なり此座に思ひを慕ふの匂香にそ
みんを千里の外にめぐらすといへども
まれ情をおさへ免きる事わきなれば人の
目にたち耳にきちわつらはしくれもえ
さる所にあるべし人の名を出すを時

あるいはさゝやく事他事をいへとも
をりふしあしくれハわか事かなとて意得
興をさます物なり一ふしある前句に
上手の案をるそしさゝゆるものなり
初心として無下に付なをしめつらしさ
詞なとを侍ところに金言をきゝてこなひ
まかんハのてりれぬきものなり亭主と
して会席をいそくべからす法礼もあま

に慇懃なるハさはりとなる也人ハ二度に
色べからす殊に千句なとは礼儀あさく
ともべし執筆をとして指合をくるべか
らす但し一座の宗匠貴人なとは各別
の事なり自然をろかなる執筆なとに
て傍よりいたてかなハさる事もあるべ
しえからハ人の句をかへしてわか句を
とひ秀逸出来よりとも出をべからす衽

句は人の付さかん間は座敷を立座か
らすわか句を秋と吟をべからすその間
連口を閉べし未座として雪月花を好
事又いさをたま石ほてかなどいふれそろ
しき言葉には世川四の馬車などいふか
ひきる詞詩賦古語などを毎度まつらふ
まつるも初心付わつかひ物なり連歌と
て嫌侍り去なかかし学匠をひるさるし嫌

べきよあかす和歌の友なれはつようかぬ
座りよといつるんなり惜学の胸よりや
りかきそる詞いひ出されし事こそ面
白く侍りられてことは連歌のこうえやなど
の一安葉も出座あかん時も古事などめ
つかしく出れは花實ともよそなそり真
あるものなりまてじをそなへしうぐ
ひを郭公などの座うなるものも毎座

につかふまつり例の文物によそひされても
たゞしきものなり何につけても心のた
こゝろなくましなき侍られふかき世を
うけてかなうすよかうへなる事に至らん
所詮連歌も大かたつかふまつれどもえて
年もそやなかもるまうん人に難なな
とは付る事もんまうけさいかしき略に
おし心つめまゐる句をつけ又さたへゆき

かぬる所はまことをてしつかすとも座
に付をもつかふまつり雪月花の前句
はそろえ又一ふし興あるべき付所をは
上手の口を待あそせ付やすき所は若
き輩人なとに付さする座かはをべしこ
れ仁をたて儀をたもくする所なりたゞ
とに角に連歌は慈悲正直をむねとすべ
きなりとぞいへり

○匠材集等ニ曰
正月をむつきともあら玉の年ともさゝ
こり月ともはつ春月ともはつ元月と
もかすみそめ月ともいふなり
二月をきさらぎともむめつき月とも
小草生月とも梅見月ともいふなり
三月をやよひとも花見月ともさ花て

月ともさくら月とも春れしみ月とも
いふなり
四月を卯月とも花のこり月とも卯の
花月ともこのはとり月ともまつり月
ともいふなり
五月をさつきともさくも月ともたち
花月ともさつきなへともいふなり
六月をみなつきともすゞくれ月とも

風まち月ともそやしれ徳ともなかみ
月とも常夏月ともいふなり
七月をふつきともふみつきとも袖あひ
月とも文ひろけ月とも七夕月とも女
郎花月ともいふなり
八月をはつきとも濃染月ともさく花さ
月とも秋風月ともつきみ月ともいふ
なり

九月をなか月ともいろとり月ともこそ
免の月ともこゝえれ秋とも紅葉月と
も小田刈月とも祢覚月ともいふなり
十月を神無月とも時雨月とも初霜
月とも小春ともいふなり
十一月をしもつきとも霜こもりつき
とも霜降月とも神楽月とも雪見つき
ともいふなり

十二月を春待つきとも年よつむ月と
も梅さく月ともそ冬月とも志はすとも
もいふなりといへり

○

満目集上に曰連歌は神のちかひ佛れ
をしへ聖賢のつたへをこまやかにようく
ひてよこしまなくさはやかにきけたか
くつくり出すべし

又曰連歌の邪魔は心を乱し言葉をふ
かくもと先古事本説をつよくもてあ
そびてハ連歌になりがたしと古賢ハ
をしへなりいさゝかも邪路に入ざる
可し
又曰古事本説にて付事む大事なり
大かた古事本説れ句ふしくれきち
侍るなり

一夜よかきるこゝろなりけり
あをいまうさ給か十日の菊れ庭
かゐりよあうまほしくいふ古詩よ

節去蜂愁蝶不知
暁庭還繞折残枝
自縁今日人心別
未必秋香一夜衰

日もてりなかゝ盛そふりける

もろこしよ二れ石をうちをきて北　心敬
深山路を切ハ木の葉れ露ちりて　宗祇
考しあはせまて侍るとそ心敬の句を
古来まてよく付侍れとも是付かた
かゝんとて祇の句をかきさそむるとこ
むかしれ好士もさを是の付所をかんかへ
しとなり當世も屋うく身拂まて
切来をきゝず見篁れをもむき自然

と清ニまある菴し
又曰柏木殿いはく當時の連哥俳諧
辨へえずとなり是こそ連哥は名誉
なれ宗砌秀る此は不しさてくちれ
しりりしゝ奉行めちて後よ秀るなし
とて専順感じやさとなり末在までも
まめりなとせん人よ此是悟ゑうる菴し
古今集よ俳諧書置し事よ此及の肝

心のよし兼載の作抄よえゑまうとい
へり

○

誹諧埋木よ曰宗養云連哥は服よ発る
よゑりひて時節をとへ客主のあひ
ちゝひ侍るべし才三よ識るをもとく
して一句によそひあるべしとそ又紹巴
云服よ発るよゝいそひてるうをたけ

ゑるく物の名かなにても一字にても詮
はなりてにをはにてもいひなかしとめ
ぬ物なり本句の発句は眼なりけれは発
句はいひのこしたる詞をもて句は未
をつけたる事によるをべし一ふし
はたてをなしたるよしをおもひて
せんは眼の句は本意にまたかひつるなり
眼にはねても五つは事あり一にも

おひたい付二にまかちそへ付三にまち
かひ付四にまてころ付五にまころま
まなり第三は眼のうちによく付はより
もまけるときを本意とせりるか
いやしきは第三は本意まるべから
す第三まお付の人はことしまけるく
優なるを第一にてはた様の義へ
初心の人まず学ひかさし風雅をかさり

第三めきたる句作りしかるべくは四
句めをハ眼の句より引さけてやさしく
と付はを四句めふりとやはとまりハな
るよりなといひなかしたるへく
は五句めも第三の句をうさきりまけを
たかく清濁あるへくは韻きらんなと
も祢てしるへくは六句めも眼の座うよ
おそひてなさるへくは七句めも五句め

より句からをやさしくと風景風情も
うりみてなさるへくは八句めも詞につ
まりは左に何となくかろくと幽玄躰
をもて付はを八句めふりとやは九句め
いことにつまりゆく物にては間前句れ
てにをはにそとおもり付るへくは
志なうし懐紙うつりの事には間句
まけ引たてられは座りになさるへく

は十一句めよりんをめぐらし思案
する要なり風姿をつけ詞をかざり
風躰をたゞしなぞあそびへよき
前句に付はたんとて面をさりて
とまをとられ前句うけられぬ所にて
付はへハ必一句もふしたちつゞぬもの
にてはまつく懐紙うつりに二句三
句れうちをんうけやすくと付られ

甚うちに思ひよりやはる出来はべく
それまで一ふし仕はへハ連哥もえな
やかなるものにてはんいてられすはて
存分よりほかのるを初んにて袮かひ
は間句毎にをとられもてゆきやりるを
細くなさを事なり気第れ気ね肝要
するべきなり名残のうらなそにこと
かまし但詞なと努くせぬものなり

付るも前るよひかれふしきれものよ
てゆへハ付るよてやをくとやる事功
者の意始なるべしといへり

○

破邪顕正よ曰連哥ハ正風を本とよのつ
ねハ付合をそてすやそゝかなる詞を
もて一るとくハ付んをあきらしくを
るを身一とこりきとへハ

のとかなりけるあけ月のくも
ゆくく涼し川つらハ石
月の光きいつる山のえハ月
けさめつゝしきそれ雪の庭
かつりえけるをふるさとハ宅
こゝろもゆかぬきぬくの石
さとりえかるハ法のことそり
うきさ身なうしもをてそかねぬる

まじはりかぬ中にも侍ひ
めぐみある世をはさまりにける
是等の句ハ日〻夜〻席ごとにあるべし
前句かゝり付心あたらしくあるゆへ
千度百度しなずしるをしてもくる
しかるまじくは邪風を好む事まゝか
風かゝりの連哥をえては何のかゝりする面
白きふしもなくいつもしなずし事ば

かりにて古めかしくあさくしとて
目にもかけすしもひくきし侍るいえ
ぬ所に余情こもり詞の外に感情ある
事をハ第にもあるべからずといへり

○

連斎至要鈔に曰しよそ連斎これ地下に
しかくひろまりし事ハ応長の比より
世にさかりにもてはやされえ侍りその

ころれ先達と定るハ善阿法師なり
かれが門弟に順覚信照救済良阿な
となり其後貞治應安の比より又かれ
が門弟に周阿法師素眼なとそてやむ
ことなきものなりかれらが弟まうり
てのち應永の比よりハ梵燈庵主これる
のともし火ともえきりそのころ満廣
四條道場のお阿などぞんもほそく伺

もやさしく作りしとなん其後永
享の比より世にあしれぬるハ宗砌法
師智蘊などなりこれらハ清岩和尚
の下にひさしくゆて斉れるをも
あれりそのころ連斉れをえへるを
れこそとええきりそれより心敬忍誓
行助専順能阿賢盛など達者あまた
あり宗祇ハ宗砌心敬などに此るを

学しなりそれより宗長宗碩宗牧
宗養紹巴などうけつぎ来りし
なり

又曰或人とふて云初心の時はいか様
に稽古して連哥は好み侍るべきや答て
云人情さまざまなるものと古人も申侍る
なり孟子といふ書には生つき情をよ
き物なれともわろき事になすれぬれは

わろくなるともいひ荀子といふ文には生
得の性はわろきものなれとも学問な
としてよくなるともいひ揚子といふ文には
は人の性はもとより善悪ましる物な
れはよき方になひくれはよくなりあしき
方になひくれはあしくなるとやなり
此三つのいはれみなそのいはれある事
なれは連哥も生れつきより天性を得た

る上手もあるべし又生得のいとつゝものも
ありとぞ古人の上智と下愚とはうつらず
すとていふにとしてもよきかたへよりまく
までとなり悪きもあしきまでに果る
なりみる善悪はまじはる性を稽
古によるべきにやうるへしく無上にも
のゝ上手になるは此世ひとりなりす八
雲の御抄にも哥の道も大聖文殊の智

恵よりわたるとくせたまひけるにや
昔にも定家卿などよませたまひける
哥は十六七にて詠せられけるにも名
哥どものおほきなり天の原にもへかも
る色もなしなとよめるは寂初の哥こ
こそまれ器量ある人は初学より面白き
秀逸をいし侍るべき事なりされと
もうるはしき稽古ありてこそ勿論

そろひ侍るべかれ初心の人まれぶくハ連哥のつまり侍るなりかまへて〳〵初学よきうきくとなるもやよちそこともなつさ成うなる事を前〳〵にして上手よまじりて次第よ詞をもみかき風情をめぐらし侍るべき事なりはじめより上手めきれも志ろうんと業りてなのつまりもちぬれバ次第

よ詞もかせんもうせてをべてあるる事のなきなりれほくむかしより上手といふ人の初心れ時の心を忘しかバ胸のうちよるがれ不くわきてすふくとるもやよ志侍ると業りしなりされバとてそのまくよて稽古なかうんよへたくふしかわのある荒木よてそやむべきうつくしく作りみかさてこそうるもし

き良材になりぬべかれむかし難波の
三位入道殿の鞠をこのみたまひしを
まゐりしに手もちかいら程もひろぎたる
がよしと教られき其次の日又あらぬ人
にあひて鞠の手もちかいらほどもせばり
するがよきと仰せられきこれハ其人
に對して教られ侍るにや後日に弱
や侍りしかハその事に侍りき此の人

もと手がきをかりまりしほどにひろけた
るがなき意にてあることをしへ後の人をひ
ろかりぬれハきをかりぬるがよきとやしく
佛の衆生の氣に對して万の法を説き
たまへるもみなかくのごとし連哥に
もあまりにごこともなかしん人を案じ
ぬるがよきことをしめべきなり但ふる
つにされべともやくてごこともなき中に

無上の堪能をものづかし出くべきなり
志けを立てたらん人もうるはしき上手
にもなるまじきにや上手に初よりそ
ひてん詞を学びたまふべし下手に
そひてわろきに耽思ぬればすべてなを
まさなき事なり初心のほど努て万
葉已下のふるき事を好みたまふべから
ず聞てあさくときこゆるはやさしく

ときこゆるを詞やさしくなだらかに志を
まふべきなり何ほどおもしろからん
と案じそまふ事あるべからずいかに沈
思したまふともよきにはあるまじきなり
みかろくときこゆるとものゝわろき
事のみにても侍るまじ其様は師匠の
をしへやうべき事なりよろつは乃
事も難をよく人にいはれてこそあがる

事なれわが身をよしとおもひてひとを
べてあやまりのおほかるべき事にや人の
ならひみな秘事を先と思ひ人のこ
とは非と思ふなり連歌もいかにもあり
自に思なん人も世のゆるさぬがやぶれ
歌とや物になりもて侍るなりかまへ
て〳〵能先達にあひてよく〳〵練習
すべき事に侍ると古の名匠たちもや

され侍るとぞといへり

○

産衣第三に曰玉箒　書し物をほめて
たまをしきといふなり
初春のはつねのけふの玉箒
手に取からにゆらく玉のを
此歌は天平宝治二年正月三日大内乃
四阿屋に諸卿集侍し侍臣玉箒を給

て豊の時に含まし時大伴家持が讀
める哥なり此哥万葉に入める本
もあり又なゝきもありゆらぐとは
のぶる事なり玉のをとハ命なり此
哥を志賀寺の老法師が京極の御息
所を戀奉りける時后の御手を給て
よミ奉りといふ事も能因が経信
卿に語られしとなり是覚束なし

まく時にあたりて古哥を取あへず
讀まれるものなるべしとなり是哥
林良材のところなりされども老人恋
此題にハ志がる此上人の心をよめる
哥たほしとなり
玉のを此手ひろにゆらく春日角　心敬
りふの子此日をいはふ初春
といふるに

賤がかふこは比られる玉箒　宗伊
是はうひこの事をいふとなり又玉箒
の說俊頼口傳にきぬ中に賤はまが箒
本の草に松をむすびそへて正月
は初子の日にかひをきるといふて蚕
乃飼屋をはくとなり是ゆへにや松
を玉箒ともいふなりとなり俊成卿
は哥に

玉箒初子は松にとりそへて
君をぞ祝ふ賤が小屋迄
又曰中の夜人のたゞへを合せずころ
もさながら九旅にさる夜を中は夜
こいふなり中をへだつる夜なり
夜さへ中にましへうとうりき
あへぬ夜をぞごにへだてさはかり
中の夜はうらめしは身や

といふ句に

浮世にも山にもつかぬ墨の袖　兼載

右の句のんを取なして付たり

月をたゞ中の夜ぞ秋乃雲　心敬

又曰流れ木　流人の事にいふて植物
にあらず流木にて左迁これなし
いけみころしゝ物にもへとや

といふ句に

流れ木のをかさぬ罪もかゝき世に　宗祇

又曰奈古曽の関　奥州にある名所な
りな来そといふ心によめり
東ぢのなごその関の呼子なる
何につくべききんなるらん
誰もいぬものをなど呼子なる

といふ句に

なごそとて此関をへし人もなし　宗祇

人はこころのかはる世の中

といふるに

逢坂も果もなごその関路にて　同

うときは何かゆかしげもなき

といふるに

わりなしな奈古曽は関の前渡り　同

すべてなごその関に意をなしては付か

たしとなり

又才四に曰草朽て蛍となる　月令に云

季夏腐草化成蛍

五月雨に草は庵も朽れども

蛍となるぞ嬉しかりける

いはくは朽は蛍とぶらん

といふるに

引捨ぶるしべ朽て人もなし　宗祇

くちぬ思ひぞ独り悲しき

連歌茶談前編

とふるに

腐草も終に螢となりもせで　心敬

又吏五に曰柳を折　旅行れ餞別に柳

を折といふ事あり

南陌人攀柳　といふるあり

帰る戸をや花にれまん

といふるに

行人に春の柳を今朝折りて

発句に

春風に行人志るふ柳かな　宗祇

君がため結べ千本れ柳哉　宗砌

又日山の端ちかき　我齢のうきふさ

たる事なり源氏に小雅に中ねれ君

の来て帰りける時の哥

深き夜の月を哀とえぬ人や

山の端近き宿にとまらぬ

たかなやむ何をまつらん
といふ句に
身をすてゝ山の端近し思ひいれ　宗祇
んをかへば秋もうからじ
といふ句に
わし光月山の端近き我齢ひ　同
又曰山梨の花　註に云く梨は花く
それを身をも遁るべき山のなきと

いふはいひかけなり
世の中をうしといひても何くにか
身をば隠さん山梨乃花
世の中を遠くと斗のがれきて
といふ句に
なをうきかげは山梨の花　肖柏
発句に
雪まきさ我は山梨の木陰かな　心敬

甚介つまなしうらなしとも云り
又曰やぶしわかぬ　物しげき陰をや
ぶしといふ白日の影いらぬ隈もな
く照し給ふといふ事なりむかし古
の今道といふ人宮仕へもせず石の上
といふ所に蟄居してまかるを儀に
司をまゐりて世に出る時よろこび
の斉に

日の光やぶしわかねバ石の上
古りし里に花も咲けり
やぶしわかぬ春日に向へ宿の梅　宗祇
又曰んの麻　直なるこゝろなり　麻中
の蓬の譬なり
まかり迚直さんとせずもたず
まつる　蓬の浅ましの身や
まつりもなかりし程もつらくて

といふ句に

人は麻乃なかのよもぎふ　宗祇

発句に

世にすぐも麻に交る蓬かな　同

此句は宗祇師宗匠なりてのち上杉殿へまゐりて此作なりかゝるまに會所の奉行などなりて此人は世に立も殿へ立入て交りをなしすぐる徳なり

といつる発句なり

又曰人の為　陶淵明菊愛の心ふかくありて籬中の為は雲を志のぶこころを思ひ給て我籬をひらきて為をはなされたることなり

我古郷はさぞ悲しき

といふ句に

籬は中に山をと人の鳥鳴て　行助

又曰胡蝶の夢　荘周夢に蝶となりて
百年が間花に遊戯せし事を作れり

百年を花に宿て過してき
これも一へ蝶の夢にぞありける

人にええなべ夢に理なれ
といふるに

誰が玉か哀れ胡蝶と成ぬらん　宗祇

又方六に曰北の翁　塞翁が事なり

きるのたきなとよむなり宋人のるに
人間万事塞翁馬
心に孫がふ事をつきせず
といふるに

人ごとに得ればうしなふ事ありて　宗祇

又曰橘中の仙人　此事を云人橘の木
をわりければ中に四仙ありて碁をう
て居けり其四仙を商山の四皓にてあ

まゐるとなり
　苞をちむなれおりほる法
　といふるに
仙人や碁に生死を忘るらん　宗祇
又曰苛政　世のうきまつり事なり
家語に云孔子弟子を伴ひ夜路を過さ
せ給ふに一母一子を抱て廣路に哭さと
夫子其故を問せまへハ答て路に猛虎

ありといふ又云汝何ぞ汝が家に帰ら
ざる又答て家にハ苛政ありと云り夫
子則これを子路にしめして苛政ハ猛
虎よりもあげしと宣せまへりとなり
　あらぬハかる国乃人
　といふるに
虎の卧山よりも世やつるかるらん　宗祇
あげしきこそ虎ハ物かハ

哭もうしさもうゝきよ此政　同
右初の句は實に苛政は虎よりもつら
かりしか甚しかりしことをこと
それより後の句は蒙求文のまゝに付
て我ものにもあらずと作者申されし
ことゝなり
又曰四知の懼　といふ事は楊震といふ
人に王密といふ人恩を受て千金を

献ぜしかども受ずして後もきるも
のなければかるしからぬ事なりと
いひし時楊震その云義を恥しめて
天知地知汝知吾知何ぞ知ものなしと
欺くやといひけれは伺なり
人はきるを何かくきらん
愚なる身を天地に恥もせで　宗祇
又曰子期知音伯牙断絃　子期と伯牙

朋友にて伯牙よく琴を弾き子期よく其音をしる伯牙が心高山にある時は則高山にある事をしる流水にある時は則流水にある事をしる琴絃の律調にうつる事白日明然たり子期死して伯牙絃を断て二度弾せず音をしるものなけれバなり知音の二字これよつて起れりとかや

しれる人ぞに今はなかりき
絲をもたや断バや老の獨りこと　宗祇
琴の音たちし人は帰らず
高き山流るゝ水はそのまゝに　同
といへり

○

連哥辨義第二に曰同ひとつ句に数多の句を續くるあり今是を前句付といふ

ふるくもありしことゝや　古今六
帖に
人のこゝろをいかでたのまん
紀友則
たきりせまう紀州の孫もとめつとも
新新のきのふの花もちれずとも
かくさなもてなさるれもきりつとも
ふる雪をそらにみてもありぬとも

入月を山の端にけていれずとも
在原ときなる
ちゝずして去年のさくらもさくむとも
田子の浦の波をべにしめとみつとも
髪をちゞに千尋の舟もつなぐとも
劫の石を蟻にわふせてそゝぶとも
蚊の眉に国郡をべたてつとも
紀つらゆき

漕ふねのさほはしづくも落ずとも
網のめに吹くる風もとまるとも
あるゝ馬をくちきる縄につなぐとも
打ればふりくる雪もとまるとも
我袖はなみだに奥もをみぬとも
凡河内躬恒
まもとゝみぬしなき影もうつるとも
佐保山の紅葉ぬ秋もありぬとも

まうつる唇をばみなもとゝむとも
年はうちに月なき月もありぬとも
手をさへて吉野のたきもせきつとも
ひとりねにあまされ台をつくるこれや
もじ先なりけん
又其三に曰亀山院の御時山城は国の
名所を賦せらるるに百韻の連歌によれ
つねの名所は大くゝきをざて今はから

をさうては四の宮かはらなどいふの
名所をも取べしとさゝとありし時

ちきりしのみやかたしさるらん　　為氏卿

とありしは

つかからすさかはなへてそたのまし　　隆轉卿

と付たまひぬその比までもとる賦物

にはゞりらん
又曰宗祇云連哥の道はまたつきなりけれ
らん人をまよは冥加をおもふべしいかに
も住吉玉津志まをあふぎまりて直を
あながまがれるをはさ自他不二の心も
ひをなさして人の師ともなり人の弟
子ともなりて終は上手ともなりけらん
ことをおこなふべし心正直なる時は

もたのつかやすらかに出るなりこ
ろ直ならねバまがれる句のを出るもの
なりさやけきる一句出れバそれに
ひかれてつゞくれ句五句も六句も連
哥わろくなるなりとのまなひし
又宗長云あらしき事を志いまし
て人に奇特と思はれんとて字もなれ
ぬ云葉をつかひあらくしきことなど

をいひ出す事あさましき事なりと
云り
又紹巴云前句に付ることをよく思案
するときは句をやすらかにせんためなり
と云りとかつり
○
老のくることに曰此度も前句付れとり
よりまていかなる定句も云妙乃物に

なりいかゞりは秀逸も無下のことゝ
まなることあり前句と我句とは間にゐ
は奇特作者の粉骨をあらはれ侍るべし
となりみいかむかりは文殊の智冨樓
那の辨までも多学利根のことにてまた
やすくなるべきにはあらず数寄
と云んと閑人とは三のこと大切の好士
なるべく哉又初心の比いろく稽古は

時まて会などをも時にまて眞切し点
などもよろしきにやさうゐに入てを
いうむかりものとやうに物ことにあられ
ふうく沈思を事とし及をたうくをる
肝要なるべしといへり

○

老はをさみに曰愚意に思ひ侍る連歌
正風を前句によるん俳諧になく一句

のさまつねの事をも詞れ上下をよく
くさりていかにもやさしくまいひな
かし物ようてぬ所をとんにかけまほし
く侍るなりされども前よりひかるく
事なれハ一座此席に志さかふへし
地盤よみましく詞えんよあらん
ここひねりて時にあたりてあしからん
ハ秋乃のやつれまきなるましくれ

ほえ侍るなり上手もれもひきかへて
ひかことある事侍るなり甚已下いふ
よをよそをやさ屋うの時まいかよも
後悔の心をもつへきなりあしたむる
にあしかることとなうれどいふ事侍る
まやこれころの作者の心を竹馬よ鞭
をうけほとにて竹馬よのかんとやふ
なりえうるあひさんことそをよへさる

友によろつれくせ出来て邪路はいり
もてゆきては正しきをは謗るをき
くひ侍るなり詮とする所この心
さしをてよろけあしに實地をふむ
て記さんしを登ことく稽古をへきも
のなりといへり

○

若草山は曰付にくきるとやは種々

ありは古事本説にて雅なるなる二
はさんのわちつゝて分別なきなる三は
きあまりやさくてよりところなきる
四はき無用れものとりこみまるなる五
はき左右をかへりえさるなる等なるへし
又曰こゝろつりひとや事は毎るはあ
るへきことなり假令は春秋の月
なといひてようんハやはをよたす

文字の事かねハ春といふ文字をくたへ
秋といふ事をそへぬるかんなとこそ
なり季ハ字大切なる故なり又させ
るふしなき下句なきに峯ハあらし
や寒き旅人なと座りにきる事なり
峯も嵐も寒きも旅といふ文字も一
座にさくなきものなり又旅ねさかり
ねとれなしほとなかりねさも付

れかしかるてとをんつかひなとや座か
らんといへり

○

問ていはく百徒の中に連哥ハ恋の
なきに男色の沙汰をこれなしさい
つり和哥にもこれなしや答ていはく
く十三代集にも男色を読る哥な
しといへとも八代集ハ中にも

古今集に一首あり
思ひ出るときはの山の岩つゝじ
いはねばこそあれ恋しき物を
拾遺集に一首あり
あまさえし是の清秡の法人に
君しも物をれもいさるかな
後拾遺集に三首あり
頼めしを待に日比の過ぬれは

玉の緒よむこたえぬ庵き哉
逢坂の関の清水やにごるらん
入にし人の影の見えぬは
余所人に成もてぬとや思ふらん
恨るかゝにわきまれやはする
金葉集に一首あり
待人の大かたわたる月ならは
ぬるも秋に影をみてまし

詞花集に四首あり
みえぬ君は每夜の月なれや
出ても人にしられさりけり
清将殿の志ハしれ恋さもあらハあれ
そり果ぬるかやかさをの鶯
鶯ハ本 傳ふ 花れ枝にても
谷の古巣をたもひわさるぞ
うらひさハ 花 の都も 旅なれハ

谷の古巣をわすれやハせる
千載集に三首あり
悲しさを先よりけにやおもはまし
かねてならはぬ別なりせハ
思ひきやそふうちなからき後の世に
傳へし笛の祢をそへむとハ
世をいとふ思ひし横川路に
あやなく人を恋渡るかな

新古今集に一首あり
昔見し月のひかりをしるへにて
今宵や君か西へゆくらん
是等男色の哥なり委しきことは北村
季吟の岩つゝじ乃上巻に見えたり
又同ていはく廿一代集の外此哥集には
めり菅ていたく續門葉集續詞花集等
に見えたり續門葉集の恋哥百五十

七首あり皆男色の哥なり僧人も僧
と童とのことなり其中志たしく二三首
を出さん
續門葉集恋の部に
建長四年此さくら恋のてちまひわ
らを吉祥ゟもとへ仁和寺なり
ける僧乃中をくりける
讀人しらす

いろくの花の姿もみえしかと
きくひとさへに露そこほるゝ

かへし　報恩院吉祥丸

たのますに色なき花のひとえさに
うつろふ露乃なさけそうかりは

櫻會まひたるわらはに三井寺なまゐる僧清瀧の社のうしろ無量光院にて物中きりたるのちほとなくさまかへぬを咎て彼僧中をとりある　後人志らす

いまはまさえてやゝみなん清瀧の
神乃うしろにありしをうさを

かへし　三寶院慈氏丸

もろともに誓ひしことをわされすは
かみのうしろはいまはなくとも

弘安九年の櫻會のわらはまひに

連歌茶談前編

報恩院救王丸か事海に波まひ侍り
けるか次の日南都に僧に中より
とてをくり侍りける

後人しるす

そこふかく思ふ人そまさりける
その事海に波をみしより

七月のころ蓮藏院に徳壽丸をえ
て同宿の實禪あさまかもと一へ中

つかはしける

阿闍梨亮深

初秋のもみちかはえし花をそれ
まねかぬ袖も露そこほるく

そのころ同宿し侍りける僧はれ
もひの外またなれてありまにを
みけるかたよりまつけて中をくり
侍りける

大智院月光丸

あらいそれ岩間の波乃うつせかひ
くたけて又もあふせありせハ

續詞花集恋の部に
房よりにしにちかとなりなる
人のもとに侍るわらはに思ひて
物申たる比月のあかき夜いひつ
かハしける

律師延真

よられせすうら山しくそ西へ行
月ハ人めもつゝまさりけり

かくひけるわらハをえて志たし
こハす侍りけるにかれわらハれふに
をれこせて侍りけるかうさくみに
かきつけりけれハ

僧都覚基

うき雲まかくにてありぬ君ささへ
見えぬをよしと思ふなるへし
又問ていはく前集の外なるものは
も男色の事ありや答ていはくこれ
あり伊勢源氏の物語狭衣枕草紙な
どにさまくれなくさを書つゞけ給
されども此一くさをもらし給へる
なり今爰にしるしてしは出せる所

此抄物をかきあらはさん在原滋春の
大和物語藤原清輔朝臣の袋双紙慈
圓僧正の拾玉集橘南袁の古今著聞
集其外宇治拾遺物語松帆物語秋夜
長物語徒然草ならびに羅山氏抄等
なり又もろこし此男色のおもむき
は泊如僧正乃續谷響集第四巻にみえ
たり

問ていはく百後の追加れ中ま忌えへ
れ三字乃指南并を出して以外にもい
ぬひほをれはわうふ等の指南并もあ
る屋しといつり其并ぬ身答ていえく
定家卿假名文字遣れ中乃玄要を拾ひ
河川免て私ま指南并を作て云
いぬひ
いしいえやいがきをいがきいへま屋い

れいのさいはいさいし忌いよう
あぬくもぬくらぬほうぬんよぬれそう
ぬんしぬざころぬざるうなぬこ
こひれもひいりあひつうひえひとひて
まれよひこよひなひてうひなし
ほをれ
さほもしほれほぞらいえほみほのうき
にほふよそほひなほびとみうほ

をそみをしをざしひをうをまういをも
こをけみをあべをのれをのく
れされとこれほきゝれとくれやれたれぬ
れきふしれさむれほせれもゝげ

はわ

まはゞぎはよはいはゝはやなはをはら
たはだまをはうわらはまはぶさ
みわうらわまわざゝなわみうこわもれ

のわたさわらびゝわくもそわざ

うふ

らうろうのれうつまえうちやうさうぐし
まうさいもうそやうじまきうづ
てふそのふゆふべまだえふゝなふそふ
ひろふてゝこふかふてたくえふ

む

むゑむぞらむばふむまやぢむもれゞび

むなぎむまひるむまごむまろひ

巳上

又向ていはくあはれひをはなれこか
なしふをうなしむうふるをうへるあ
ふりをけむりとよむ等もめゆ答てい
たく愚作ま出せる指南哥も假名文字
遣にあるところハ十四字でうをなり
其餘も更ま学習きべし

右此茶談も朝夕喫茶の雜談を
宴まかきあり免て跬歩乃輩に
はきふるものなり愚老が婆心
是をおもふべし云云

白雲堂無相

附録

○抄物作者之事

一八雲御抄は人皇八十四代順徳院之御製なり

一新式は大納言為藤卿の作なり追加は後普光園攝政良基公應安五年之作なり今案は後常恩寺関白兼良公亨德元年之作なり增加は牡丹花老

人文亀二年勅をうけ奉りて此作な
り已上無言抄の意なり註抄ハ紹巴
法眼慶長四年此作なり産衣に紹巴
新式に註をくはふるもの是なり
一菟玖波集ハ二條の太閤良基公文和
五年此作なり辨義ハ兼良公くはふ
る時代お遠せり
一さゝめことハ十住心院心敬僧都寛

正四年此作なり新撰菟玖波に百廿
余句入し心敬一人なり
一大原三吟ハ宗祇法師宗長法師櫻井
基佐の三人文明十四年此作なり
一老葉ハ種玉庵宗祇法師の作にして
自註あり又宗長法師此注并に永正
十七年の奥書あり
一至宝抄ハ紹巴法橋天正十四年此作

なり
一無言抄は高野木食興山上人天正十四年の作なり其後慶長八年勅をうけたまはりて再治せらるものなりよりて二品親王の奥書あり紹巴法眼の〆判あり
一匠材集は紹巴法眼慶長二年の奥書に曰此一冊はそのかみ誰人の志わ

さといふ事を志らぬとも末代の重宝なるべきものなりといへり
一假名文字遣は一冊にして濫觴の事の端書ならびに紹巴乃奥書あり
一滿目集は飯依彦國龜山廟神主慶安二年の作なり
一埋木は北村季吟明暦二年の作なり季吟は八代集ならびに伊勢源氏大

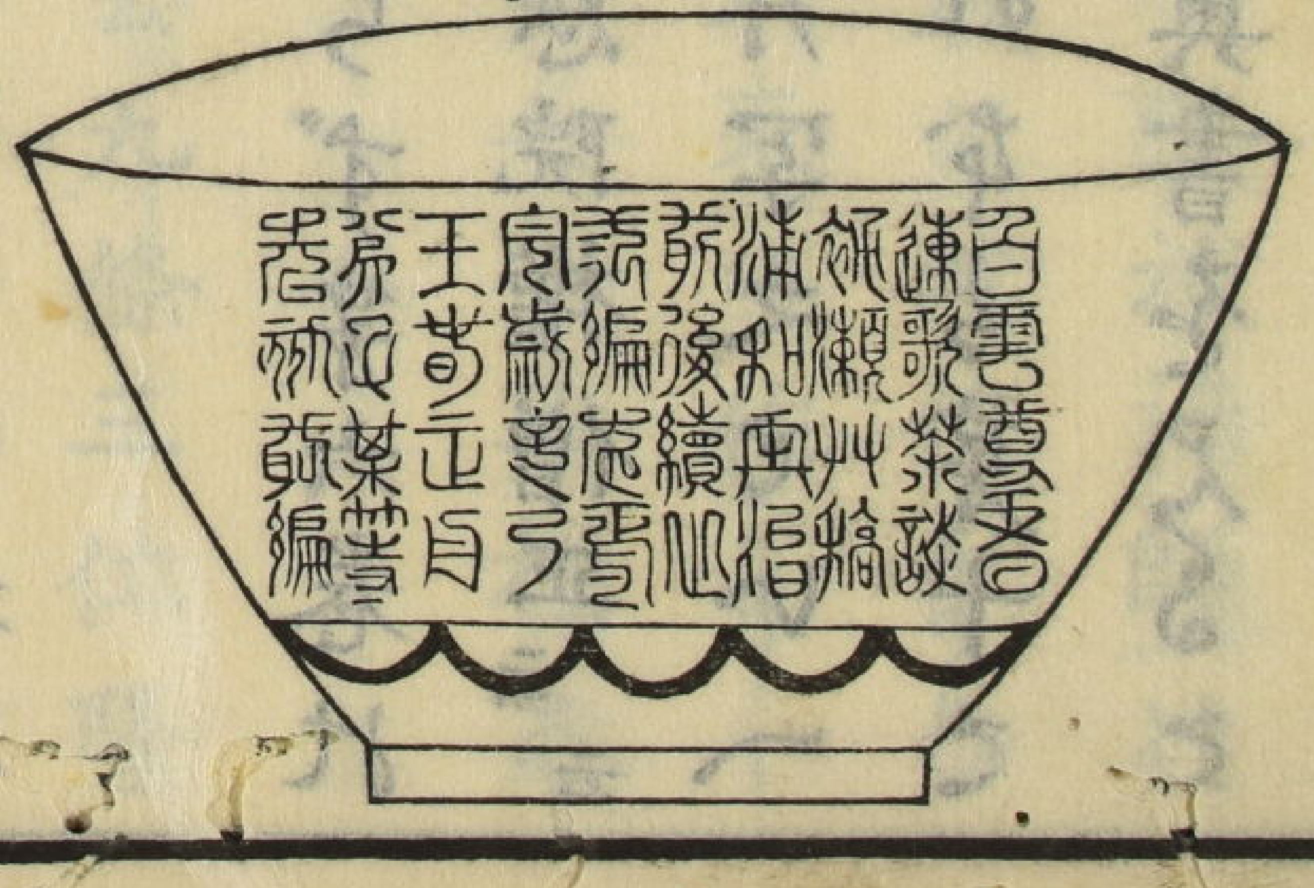
和物語枕草子徒然艸等の注者なり
一破邪顕正ハ如是庵桒門西順元禄五
年の作なり
一至要鈔ハ元禄十二年梓行の跋ニ曰
連哥至要鈔ハ何人の編著なる事を
しらずといへり
一産衣ハ作者をしらずといへども連
哥の道にこゝろざす人ハ此書なくん

ばあるべからずしかれバ末世の至
宝これにをよぶものなし
一辨義ハ阪昌周明和六年の作にして
前權大納言家長の序巻下法眼昌桂
の跋あり
一老のくりごと老のすさみ若草山の
三抄ハ塙撿校保己一の群書類従に
連哥部五冊にして九種あり其中の

三種なり老のくりことは心敬僧都の作なり老のすさみは宗祇法師の作なり若草山は相國載公の作なり群書類従は安永八年以来の作にして六百七十冊一千二百七十三種あるものなり

一續詞花集は北村季吟云九條三位隆教卿撰但八雲御抄清輔依二條院仰撰云云といへり群書一覧第四私撰部にも此趣見えたり

一續門葉集は作者をしらず第六巻の奥書に曰本云撰者報恩院權僧正云云十帖之内文祿四年八月写之といへるを予が閲するところのなるは第十これなしよりて大尾の奥書をみることを得ざるなり

文政三箇一

孟春念五日